

# 六十九首本『小町集』の考察

角 田 宏 子

はじめに

『小町集』の伝本は、既に系統立てて整理されており、論題に掲げた「六十九首本」とは、次の分類<sup>(1)</sup>中、第二類に該当する本である。

## 第一類 歌仙家集本系統

(1) 一二五首の「書陵部(五一〇・一一二) 甲本系」

(2) 一一六首の「書陵部(五〇六・八) 乙本系」

(3) 一一五首の「正保版歌仙家集本系」

第二類 「西本願寺本系統」或いは「神宮文庫本系統」と呼称される六十九首本系統

第三類 冷泉家本「小野小町集 唐草裝飾本」は四十五首

そもそも、昭和十八年に前田善子氏が、総歌数百首以上及び百首に近い『小町集』十二伝本を取り上げ、群書類従本を底本とした校異を呈示された<sup>(2)</sup>。それら所謂流布本に対して、昭和二十二年に同氏が「異本小町家集について——神宮文庫所蔵異本三十六人家集・及び架蔵異本三十六人家集Ⅰ・Ⅱ中の小町集に就て——」<sup>(3)</sup>という論で紹介された

のが、歌数も体裁も大きく異なる六十九首の『小町集』であった。集合体の一部を成す『小町集』の成立は、『西本願寺本三十六人集』の製作にまで遡るが、『小町集』に関しては、当時の本が未だ見つかっておらず断簡も残らない。もつとも、散佚前の『小町集』が、この六十九首本の系統であったことは、久曾神昇氏が指摘されている<sup>(4)</sup>。

註(1) 片桐洋一氏「小町集 解題」『新編国歌大観 第三卷私家集編Ⅰ』角川書店(昭和六十年)・藤田洋治氏「歌仙家集・正保

版本の一性格——その二 遍昭・小町・敏行・友則・小大君の家集を中心に——」『東京成徳短期大学紀要 第二十七号』

(平成六年)・杉谷寿郎氏「平安私家集研究」新典社(平成十年)・片桐洋一氏解説『冷泉家時雨亭叢書第二十卷 平安私家集七』(平成十一年)・島田良二氏「御所本三十六人集 本文・索引・研究」笠間書院(平成十二年)の表現を借りて総

合している。

(2) 前田善子氏「小野小町」三省堂 昭和十八年六月

(3) 『国語と国文学 昭和二十一年八月号』東京大学国語国文学会 所収

(4) 久曾神昇氏「西本願寺本三十六人集精成」風間書房(昭和四十一年三月)には、六十九首の「醍醐本」なる本が翻刻されている。

#### 注記以外の参考文献

片桐洋一氏「小野小町集考」『国文学 言語と文芸46』東京教育大学国語国文学会 昭和四十一年五月

島田良二氏「平安前期 私家集の研究」桜楓社 昭和四十三年四月

橋本不美男氏「御所本三十六人集」解説 新典社 昭和四十六年一月

小松茂美氏「小町集」『古筆学大成 第十七卷』講談社 所収 平成三年五月

室城秀之氏「小町集」『和歌文学大系18 小町集・遍昭集・業平集・素性集・伊勢集・猿丸集』明治書院 所収 平成十年十月

## 一 管見の五伝本について

六十九首の『小町集』の内、影印で見ることの出来た五伝本<sup>(1)</sup>の特徴と関係について考察したい。六十九首形態の『小町集』は、次のような『三十六人集』に入る本である。

- a 神宮文庫蔵三十六人集(三ノ一二〇四)
- b 宮内庁書陵部蔵歌仙家集(五一・一一)
- c 宮内庁書陵部蔵高松宮本三十六人集
- d 大和文華館蔵三十六人集(三・三九二一―三九二五)
- e 蓬左文庫蔵三十六人集(一〇六・三七)

久曾神氏が紹介された『醍醐本『小町集』』の原本及び影印本は管見に及んでいない。また、先掲前田氏論文中の異本三本について、考察は行っているが、紙幅の都合で割愛した。ただ、その結論のみを記せば、掲載三伝本のうち、「神宮文庫本(異本三十六人家集中小町集)」とは、右「a 神宮文庫本」系統の本のことであり、前田氏「架蔵三十六人家集Ⅱ(豊前本)」なる本は、「d 大和文華館本」と同系統の本である。「豊前本」と「d 大和文華館本」には類似した奥書がある。しかし、前田氏「架蔵三十六人家集Ⅰ(中院通茂本)」なる本は、右の五伝本中に該当するものがない。前田氏は、この「通茂本」の大きな特徴を、「冬道をゆく人の」以下の文章の扱い方にあると言われる。つまり、六十九首本の末尾には歌物語的な箇所が存するが、その中の「冬道をゆく人の」以下の文章が最末尾の歌である「手枕の」歌の詞書のように扱われ、その前の詞書よりも「一段字配を上げて書かれて」いるらしい。このことを管見五本の六十九首本で見ると、先掲aからe本の内では、字配を一段上げているというものはないが、「b 書陵部

本」及び「c 高松宮本」では、「冬道をゆく人の」で改行し、改行の前に一行の空白を設けている。「冬道をゆく人の」以下を独立させて次の歌の詞書のように記している点では、前田氏提示の「通茂本」は、b及びc本に似ている。

右のaからeに見る六十九首形態の『小町集』には、大きな違いがない。同系統とされている所以である。写本の性格上当然のことながら、五伝本のうち、漢字仮名の当て方に至るまで完全に一致しているという本はない。では、どの程度の一致が見られるのか、漢字仮名の当て方、更に仮名は字母のレベルに戻して一致箇所を数量化したのが、本稿末尾に付した【資料1】の表である。例えば、第一歌の「3」という数字は、「b 書陵部本」と「c 高松宮本」とで比較した場合、第一歌全五句中「bあやめくさ・cあやめくさ」「b思比し八・c思ひし八」「b思ふ成个り・c思ふ成个り」の三句までが一致していることを示す。以下同様であるが、第五十八歌の長歌は、四十九句から成っているので、四十九句中何句一致しているかという数字である。また、詞書や後書等、歌以外の箇所は、文節毎に一致数を見た。【資料2】である。字母までの完全一致という、かなり厳しい条件の下でも、「b 書陵部本」と「c

高松宮本」は、歌、詞ともに高い一致数を示している。その密接な関係を有する両者の間で、「0」即ち一致する表記を持たない歌があったり、逆に「4」以上の数値の大きい、即ち、共通する句を多く有する歌があったりする。

ここに何か考える余地がありそうにも思うが、今は用意がない。また、歌本文と詞書等では、それぞれの一致数の順序が異なっている。それでも、「d 大和文華館本」と「e 蓬左文庫本」との関係は、b・c本との関係に次いで深いとみえる。【資料2】詞書等の結果に就いては、流布本系の本文調査を経て再度考えてみたい。以上は、数量化した全体像を捉えようとしたものである。次に、右のような計量には載らない点に着目し、伝本相互の関係を考察してみた。

註(1) 国文学研究資料館のマイクロフィルムを利用して頂いた。

## 二 各伝本の特徴と相互関係

### ① 「b 書陵部本」と「c 高松宮本」

「b 宮内庁書陵部藏歌仙家集(五一一・二)」と「c 宮内庁書陵部藏高松宮本三十六人集」は、「歌仙家集」と「三十六人集」という呼称の差はあるが、ともに十冊本の三十六人集であり、『小町集』が収録されている巻に入る他の歌人も類似している。料紙を改める箇所も同じであるので、同一の本と見て良いのであろう。歌や詞の完全一致数が最多であったのは、先の表で示した通りであるが、それぞれの本に見られる文字の書き癖のようなものを考慮すれば、さらに一致数は増える。例えば、二本は、次のような仮名遣いをする。第一歌詞書中「人を」(01|0)<sup>(1)</sup>、「有るにあ留越」(23|2)等、「を」「越」のワ行とすべき箇所を、「c 高松宮本」は、「人於」、「有多尔あ留於」というように、「於」字を用いている<sup>(2)</sup>。また、約半数は同じ文字を使用し規則的な仮名遣いをするなかで、「b 書陵部本」が「仁」とする箇所に「c 高松宮本」では「尔」字を用いているなども特徴的である。そういった書き癖ゆえに、先に計量した完全一致数に載らなかったという例は多い。

書人に関して、「b 書陵部本」の書人は二箇所(39|5・61|5)あり、ともに「イ」と付されている。一方、「c 高松宮本」の書人は二十二箇所ある。「於も者し」の「者」を「連」に、「ちれるなけき」の「ち」を「者」に、「声」の「こへ」を「こゑ」にするなど、或る文字を訂正して書くもの(29|2・38|4・68|0)が三例、「ことそともなく」という成句に更に「も」を重ねて書き入れているもの(10|4)一例、b本同様に「イ」と付す書人を有するもの(39|5)一例で、その他は全て、ア行の「お」にワ行の「を」を傍書するものである。

「b 書陵部本」と「c 高松宮本」がごく近い関係にあるとすれば、それでは、転写に関して、何れの本が先行するのだろうか。私は、「b 書陵部本」ではないかと考える。文字の当て方に関して、「b 書陵部本」の方で、途中から用い方の規則が崩れているからである。即ち、「b 書陵部本」では、二本の異なる親本から転写した跡が残っているように思われるのである。「b 書陵部本」「c 高松宮本」で、「に」「尔」「仁」「耳」を使用する箇所は一七ある。その内訳は、b本・c本を対照させた場合、「b仁・c尔」が四十四例、「b耳・c尔」が十三例、「b本・c本同じ」場合が六〇例であった。この内、b本で「耳」字を用いる箇所にc本で「尔」を使用している十三例は、六十九首中、五十四番以降に目立って増える。つまり、第五十三番歌迄は、「に」の表記は、同じか、或いは又、b本で「仁」を用いる際にc本で「尔」を用いるという表記であった。しかし、第五十四番歌以降の「b 書陵部本」には、「耳」文字が顕著に混じって遣われだす。「b 書陵部本」の「耳」字の使用は、全て第五十四番歌以降である。一方、「c 高松宮本」の方には、そのようなことはない。これは、「b 書陵部本」の拠った本、或いはその又親本の『小町集』が、二種類の本から書写され、それが併合された跡を留めていることを示すのではないだろう。第五十四番歌以降とそれ以前の仮名遣いの顕著な違いというものは、「b 書陵部本」以外の四伝本の何れにも見られない。「b 書陵部本」が先行するのではないかと考える次第である。

「耳」字母の使用に関する現象は、原初の『西本願寺本三十六人集』中の「小町集」と何か関わりがあるか。同三十六人集中で散佚前の「小町集」は、第六筆の手になるものと、前掲久曾神氏の論考では推定されている。また、松本暎子氏に『西本願寺本三十六人集の字彙』の研究<sup>3</sup>があり、書写者毎の語彙が考察されていて参考になる。しかし、右の現象は、筆者の書き癖よりも『小町集』独自の親本と深く関わる問題であろうから、現段階では、松本氏の研究により、『西本願寺本三十六人集』全体として「耳」字母の使用が多くはなかったとしか言えないかと思う。

② 「d 大和文華館本」と「e 蓬左文庫本」

「b 書陵部本」と「c 高松宮本」の一致数の高さに次いで、「d 大和文華館本」と「e 蓬左文庫本」の近似も数量的によく表れていたが、この二伝本の近接している様相を確認しておきたい。両者は、第十六歌三句「藤浪」、第十八歌初句「木枯」のように、同じ漢字を当てるが、他にも【資料3】のように特異な本文を一致させるといふ例がある。第八歌二句(08―2)「やへ白雲と」「屋へ白雲と」は、d・e本ともに「の」字が脱落している。第六十一歌詞書(61―0)も「あまこひ」が「あまのこひ」に変わってしまっている例であつて、「の」字一文字の違いで「雨乞い」が「海人の恋」となる。「海人」は『小町集』歌の特色を成す詞の一つであるとはいへ、第六十一歌一首、即ち、

たいこの御時に、日てりのしければ、あまこひのうたよむへきせんしに

千はやふる神もみまさはたちさはき あまのとかはのひくちあけた〇へ

(『小野小町集Ⅱ』『私家集大成 第一卷』所収本文による。歌の引用は以下同様)

に着目すれば「海人の恋」では歌意が通らないのは明白である。第三十二歌

今はとて我みしくれにふりぬれば 言の葉さへそうつろひにける

の四句(32―4)にも、「こ能は」「木葉」という「の」字脱落に依拠する異同が生じている。添加されるものが「木の葉」では「人の心」の移ろいを主体とせず、歌意が通じないところである。或いは又、第四十一歌

あき風にあふたのみこそかなしけれ わかみむなく成ぬと思へは

の第二句は、他本が「たのみ」とするところを、d・e本では「このみ」としているのであり、「多」と「己」が見誤られた所から生じた異同であろうが、「木の実」では「かなし」との関連性が希薄である。それらには、書写す

べき本文をあまり省みずに転写された跡が窺える。そして、第五十三歌結句(53|5)「个れ」「遣禮」でも、見誤られ易い「り」と「留」の異同を離れて、両者ともに「れ」とする。或いはまた、第九歌初句(09|1)「恋侘て」や第二十二歌初句(22|1)「かきりなく」などは、他の三本と一文字の違いであるものの、これらの異同がどこから出てきたのか分からない例である。ともに流布本系『小町集』の当歌とも異なり、この歌を採る他の撰集の形がそうであるという訳でもない。以上のように、この二本は、特異な本文を共通させているのである。

それでは、近接する「d 大和文華館本」と「e 蓬左文庫本」の内どちらが先行するのだろうか。私は、「e 蓬左文庫本」の方であろうと推測する。【資料3】で「d 大和文華館本」の第六十六歌詞書(66|0)は、他と比較して途中までしか記されていないように見える。即ち、意味の通じない箇所を「d 大和文華館本」が省略したような形になっているように思われる。また、第四十一歌第二句(41|2)の「d 大和文華館本」には、他本を顧慮した書入がある。「d 大和文華館本」の書入については多くなされているが、明らかに墨色薄い流布本系本文の書入と思われるものは資料に掲げなかった。しかし、ここでの書入は、それとは異なるものである。書入に関しては、その時期に慎重にならねばならないが、そういった他本を顧慮した形跡が一方にのみ備わるという点で、顧慮した形跡の残る「d 大和文華館本」の方が後に成立したと推測する。

### ③ 「a 神宮文庫本」

b・c本という近接する伝本及び、d・e本という近接する伝本の様相をそれぞれに見た。それら二つのグループと他の一伝本「a 神宮文庫本」とは、どのような関係にあるだろうか。結論から言えば、b・c本の方に近く、特に「c 高松宮本」に近い性質を有すると思う。「a 神宮文庫本」は、六十九首本『小町集』の内で最も古い奥書

を有していた<sup>4)</sup>。更に一点の「a 神宮文庫本」の特徴は、先にも触れたが、第六十二歌「滝の水このもとちかくなかれすは」歌の詞書が脱落していることである。これは、「a 神宮文庫本」が、「b 書陵部本」及び「c 高松宮本」系統の本を転写した形跡を残すものではないかと考える。即ち、b本及びc本では、第六十一歌「ちはやぶる」歌と、それに続く第六十二歌の詞書までが八葉末に置かれ、九葉目が六十二歌「滝の水」歌から始まっている。料紙を換えた、その書き始めはb・c本とa本と同じである。「a 神宮文庫本」は、親本の次の歌の始まりに気を取られて、九葉目を「滝の水」歌から書き始め、前葉末尾にあった詞書を脱落させたのではないかと推測される。この詞書の脱落は、他の四本には見られない。

その他にも、「a 神宮文庫本」がb及びc本と深く関わる例がある。【資料3】第四十一歌二句(41―2)で「a 神宮文庫本」は、b本・c本と同じ形をしていた。【資料4】中第五十六歌詞書(56―0)は、女郎花の歌であるが、「d 大和文華館本」「e 蓬左文庫本」が「折て」又は「於りて」とするのに対して、これも「a 神宮文庫本」は、「b 書陵部本」「c 高松宮本」と同じ「ほりて」という形をとる。第五十六歌初句(56―1)も同様である。第五十六歌第四句(56―4)は、「a 神宮文庫本」だけが、「おら」ではなく「おく」とする。「ら」と「く」を見誤ったのであろうが、その原因は、b本及びc本にある。即ち、「おられ尔」の「お」の最後の筆の扱いと「ら」の一筆目が続いて「く」のように見え、「ら」の最後の払いの前で筆を休めているのが、「b 書陵部本」「c 高松宮本」である。そういった点では、「a 神宮文庫本」は、b・c本と同じグループに入れられてよいのではないかと考える。第六十一歌結句(61―5)も、「a 神宮文庫本」が、「b 書陵部本」「c 高松宮本」の「日くち」と同じ形をとる例で、「d 大和文華館本」「e 蓬左文庫本」の「みち」「三地」とは異なる。因みに、これは、b・c本の「日くち」の「日」と「く」字が続くことで、「見」のように見えた為に「みち」という異同が出てきたものと

推測される。

以上は、「a 神宮文庫本」が、「b 書陵部本」及び「c 高松宮本」の影響下にあることの根拠を補強する例であるが、b及びc本に焦点を当ててみると、次の【資料5】などは、「a 神宮文庫本」が、それらのうちでも、特に「c 高松宮本」との関わりを強く持っているように見える例である。第一歌詞書(01-0)は、「a 神宮文庫本」だけが、「人尔」となり、他の四本は「人を」或いは「人於」である。流布本系『小町集』のほとんどが、「五月五日さうぶにさして人に」となっているのが、流布本との関係も思われたが、影印で見れば、「c 高松宮本」の「於」字が、「仁」に見えたのではないかと考えられ、「c 高松宮本」の影響を受けていると推測する。第一歌二句(01-2)も、五伝本のうちで言えば、「c 高松宮本」の「と」の一筆目が短く、書写者は、「く」と見たのだろうと思う。判別し難い「d 大和文華館本」を「ミ」と読んだが、「ミ」と見誤る可能性もある。第十歌四句(10-4)の「c 高松宮本」でも「ことそ」の次に記された文字が判読し難く、「も」を傍書しているが、その判読し難さが「a 神宮文庫本」に影響して、よく似た表記になっているように思える。第十三歌三句(13-3)「c 高松宮本」の「八」は、「凡」のように続けられて、「a 神宮文庫本」が、「可」とするように「可」の崩し字に見える。また、第二十一歌三句(21-3)「c 高松宮本」の「無」字の判読し難さが、「a 神宮文庫本」の書入——ん(む)——に反映していると考ええる。これら五例は、影印で比較すれば、「c 高松宮本」の影響下に「a 神宮文庫本」が成立したことを推測させる例である。先にb・c本とd・e本という大きなグループ分けの箇所【資料3】で提示した第四十一歌二句(41-2)「たのみ」「このみ」の異同も、「c 高松宮本」に起因すると思う。即ち、これは「多」の崩し字が「己」と混同されているところから生じた異同であって、二筆目弱く「多」と「己」の両者何れか判別し難い書き方をしているのは「c 高松宮本」である。

以上のように「a 神宮文庫本」がb・c本のグループに近いとは言えるものの、しかしながら、b本・c本のうちの何れに近いかと言うときに、右で見たような「c 高松宮本」との密接な関係を積極的に言えない例もある。六十九首本『小町集』には、末尾に歌物語的な本文箇所を有している。その中でも「a 神宮文庫本」は、微細であるが【資料6】に掲げるようにやや特異な本文を有していた。第六十八歌書入については、第四句(68―4)を、【資料7】のように読んだが判別し難い。本文の意味から考えれば「小野とはならじ」或いは「小野とはなくて」が正しいのであるが、b本・e本が比較的明瞭にb「なくし」、e「ならし」とするのに対して、c本・d本は「なくし」とも「なくらし」とも見え、a本は「なくし」とも「なて」とも読める。「a 神宮文庫本」では、「く」の二筆目が「て」の一筆目と重なっている。その「く」の二筆目の止めが水平すぎた為に次の「し」と続く際に「て」に見え、『私家集大成』で翻刻されているように「なて」と読めるのである。書入の「い者」は、「なて」と読んだ上でなされている。因みに、「醍醐本『小町集』」でこの箇所にて「てカ」という書入があるのは、何か「a 神宮文庫本」の本文との関わりの中で出てきた校異或いは所見なのではないかと思う。この例の影印からは、「a 神宮文庫本」は「なら」とも読めるc本よりむしろ、「なく」と明瞭に記す「b 書陵部本」との関わりが想定される。その他にも、第三十七歌四句(37―4)の「a 神宮文庫本」は、「見てや、三て」と「に」字を落としている。「に」が書き入れられているが、この書入が誤りと気づいて直ぐに訂正したものか、後のものかは分からない。仮に「に」を見落としたとすれば、c本の「美」を字母とする「み」ではなく、「三」と続けられて判別し難くなっていた「b 書陵部本」の「三尔」の表記に起因する可能性もある。また、第四十四歌二句(44―2)で「a 神宮文庫本」は、d及びe本同様に「幾ぬ留」となっている。「a 神宮文庫本」が意識的にそう変えたのではなく転写の過程で見誤ったとするならば、親本は、「c 高松宮本」の「きいる」よりも、「b 書陵部本」のように「き井る」というワ行の「ゐ」で

あつたと見る方が自然であろうと思う。同様に、第五十八歌三十六句目(58—36)「セルみ留たつの」という「a 神宮文庫本」の形も、「c 高松宮本」の「い」字よりもb本の「ゐ」字に倣つたと見る方が自然である。第五十六歌二句(56—2)も、「c 高松宮本」の本文が「a 神宮文庫本」に反映されていない。a本以外は全て「猶」であるが、「a 神宮文庫本」は「な越」——恐らく「名を」のつもりであろう——とする。以上の五例は、a本とc本の直接的な影響関係が言えない例である。しかしながら、結論的には、先の例より「c 高松宮本」系統の影響下に「a 神宮文庫本」が成立した可能性が高いと考える。

④ 「e 蓬左文庫本」

「a 神宮文庫本」が、b本・c本と密接な関係を有しており、また、「d 大和文華館本」と「e 蓬左文庫本」では「e 蓬左文庫本」が先行すると考えられることは先に述べた。そうであるならば、「a 神宮文庫本」系統の本から「e 蓬左文庫本」系統の本が転写されたのだろうか。両者の関係は、【資料1】の統計に於いて比較的高い数値を示しており、或いはまた、密接な関係を示す【資料8】のような例もある。しかし、その二例だけで、他に直接的な影響関係を想定する例を見つけられない。私は、「c 高松宮本」系統から「a 神宮文庫本」系統と「e 蓬左文庫本」系統とに分かれたのではないかと考える。「e 蓬左文庫本」も、a本に対して以上に「c 高松宮本」との関わりが深いように思えるからである。「e 蓬左文庫本」独自の本文について、第十一歌二句、第三十六歌二句では、句末の一字を落としていたり、第十二歌結句では、他の四本全てが「をり」とするところを「介り」とし、第五十三歌初句も、他本が「今とても」とするところを「今八とて」とし、更に第五十七歌初句で他本全てが「うへを」とするところを「うへ尔」としたりする。それらの異同がどこから生じたのかは分からない。それに、「c

高松宮本」と「e 蓬左文庫本」に影響関係があると思われる箇所でも、翻刻すれば本文が異なっている。しかし、影印からは両者の関係を窺える例が挙げられると思うのである。例えば、【資料9】第二十一歌四句(21|4)は、b本・c本が「人め」とするところを、e本は「人の」、d本は「人能」とする。この異同は、「め」字を「e 蓬左文庫本」が「の」と見誤ったことから生じたものであり、一方で「d 大和文華本」が明確に「能」と記すのは、最終的に誤解を避けて表記を求めた為と推測する。また、第五十八歌十九句(58|19)は、「c 高松宮本」「冬のみ」の「ま」が「よ」と見誤られたのであろう。しかし、この場合も、「d 大和文華館本」は、「夜」と明確な表記をしている。

同じく「c 高松宮本」と「e 蓬左文庫本」とに着目した時に、その影響関係をいつそう強く認めるのが、次の例である。第五十二歌四句(52|4)の「れ」字の扱いでは、「c 高松宮本」の「連」字の影響を「e 蓬左文庫本」が承けている。a本・b本は「禮」を用いた「れたる」、d本は「王たる」とする。また、第五十八歌十句(58|10)でc本「志けさ」とe本「志けき」の異同は、「c 高松宮本」の「け」の三筆目と続く「さ」の一筆目が、「き」に見誤りやすく書写されていることに起因しよう。第五十八歌二十八句(58|28)でも、「ひる時のなく」とするb本と異なり、a・d・e本は、「ひる時もなく」とする。「の」と「も」の異同が生じた原因は、「c 高松宮本」の影印で見える、「時那く」の「那」の崩しに「も」を含むと判読されたからであろうと推測する。c本中の判読し難い箇所が、a本及びe本に受け継がれているのである。第十六歌四句(16|4)「なひくかことは」(「靡くが如は」の意味の句)の場合、「b 書陵部本」は、「可と」に見える。「c 高松宮本」は、「可」とも見えるがまた、「こと」と続けられているようにも読める。「なひくかとは」では意味の通じないこともあって、a・d・eの三本は「か」「可」「加」を明瞭に入れたのであろうが、「かことは」の箇所に、a本及びe本は、続け表記された「こと」の文字

を残している。以上は、「c 高松宮本」と「e 蓬左文庫本」との影響関係が窺われる例であり、「c 高松宮本」を岐点に、「a 神宮文庫本」系統と「e 蓬左文庫本」系統とが分かれたと考えるものである。

註(1) ( ) は、歌番号と句番号を示す。例えば、「01—0」は、第一歌の詞書の意味である。以下同じ。

(2) 「b 書陵部本」「c 高松宮本」で、「を」「越」「於」「お」を使用する句は、全部で七〇あり、その内訳は次の通りである。(b・c)、「を・於」十三例、「を・お」四例、「越・於」四例、「を・越」十五例、「越・を」二例、「同じ」「於」「お」も同一と見なす——二十五例、(b・c いずれかに「思」「小」の漢字を使用) 七例

(3) 松本映子氏『西本願寺本三十六人集の字彙』平成十年八月 汲古書院

(4) 前田氏論に掲載の奥書をその表記のまま、記載される年代順に掲げると『神宮文庫藏本』「此集三條新黃門実藤卿取筆也去十一日 送之今日申刻到来了 慶長十二年四月十六日 也足子」(一六〇七年)・『豊前本』「此三十六人集本數五帖にて全部也十八人の哥あり、時萬治二とせ小春後の八日豊の前中津川にして書之 栄譽宗蓮坊」(一六五九年)・『通茂本』「以烏丸中納言本模寫之去十六日 始之今日遂其功一校了延寶五季 姑洗十九 特進水」(一六七七年) のようになる。

### 三 結 語

仮説として提示するならば、管見五本の関係は、近似しているものの「b 書陵部本」から「c 高松宮本」へと転写され、そこから「a 神宮文庫本」と「e 蓬左文庫本」とに分かれて、更に「e 蓬左文庫本」から「d 大和文華館本」が転写されたのではないかと考える。勿論、現在見ることの出来る本そのものではなく、大きな転写の流れのなかに、介在する伝本があったかもしれない。又、以上は本文のみをもとにする仮説であって、本の形状、即ち本の形や、料紙、墨などの特徴は、考慮出来ない。右五伝本の内では、「e 蓬左文庫本」だけが柀型をしてている。『西本願寺本三十六人集』は、四半の草子であるので、それが柀型(六半の草子)というように形状を変えて書

写されることで、書写された本文への影響が全くなかったとは言えない。

最後に、六十九首本を代表させる呼称に用いられてきた「a 神宮文庫蔵三十六人集(三ノ二〇四)」中の『小町集』について、この本は、六十九首本系では最も古い詞書を有しており、又、先に二の③で触れたように、散佚前の『小町集』なる「醍醐本『小町集』」との関わりが見られる本である。しかし、その「古さ」は、末尾の歌物語的な本文を備える本としての「古さ」であつたかもしれない。今日目にする六十九首本は全て、末尾に歌物語的な箇所を備えている。しかし、先述のように「b 宮内庁書陵部蔵歌仙家集(五一・二二)」に増補の痕跡が存することより、『西本願寺本三十六人集』中の原初『小町集』が、歌物語的な箇所を備えていない、或いは、もっと少ない歌数の本であつたことが窺われる。今後、歌物語的な本文を持たない、恐らくは持っていなかつたであろう『小町集』の存在を積極的に考察の対象とする視点が必要であると思う。また、六十九首本を代表させる呼称については、歌数を併記すれば誤解はないものの、「a 神宮文庫本」ではなく、現存する管見五本のうちでは古態を保つ「b 書陵部本」系統を以つてするのが相応しいと考える。

なお、冒頭に掲げた分類のうち、第一類(一)系統中一本の奥書に、「六十九首」なる本の記載<sup>(1)</sup>があるが、これが、今日見るところの六十九首本であるのか否かについては、流布本系統の本の考察と併せて次の課題としたい。

註(1) 「建長六年七月廿日重校合□九条三位入道本畢。彼本歌六十九首云々」(小松茂美氏『古筆学大成 第十七卷』中の翻刻を抄出)

(すみだ ひろこ・関西学院大学文学部非常勤講師)

【資料1】

69首本 番号	b書陵と c高松	c高松と e蓬左	b書陵と e蓬左	c高松と a神宮	b書陵と a神宮	e蓬左と a神宮	d大和と a神宮	c高松と d大和	b書陵と d大和	e蓬左と d大和
1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	1
2	3	1	1	1	1	2	1	0	1	1
3	2	1	1	0	0	2	2	1	1	2
4	1	1	0	1	0	0	1	1	1	0
5	1	2	3	2	2	3	0	1	0	0
6	3	1	2	0	0	1	1	2	2	1
7	3	2	2	1	1	1	2	0	0	0
8	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0
9	4	1	2	3	3	2	1	1	1	1
10	3	2	2	1	1	2	1	1	2	1
11	3	0	0	1	1	1	3	2	2	1
12	1	2	1	1	1	2	1	1	0	1
13	2	3	1	0	0	1	0	1	0	0
14	0	2	0	2	2	0	1	3	0	1
15	4	2	2	2	2	3	1	1	1	0
16	2	1	0	2	0	1	1	2	2	2
17	1	3	2	0	1	0	1	1	0	0
18	5	2	2	2	2	2	2	2	2	2
19	1	0	0	0	0	0	1	2	2	0
20	2	2	0	3	1	2	0	1	1	1
21	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0
22	3	2	2	1	1	0	0	2	1	2
23	2	2	2	1	0	2	2	1	0	1
24	3	2	1	2	1	3	2	0	1	2
25	2	0	0	1	1	2	1	0	1	2
26	1	0	0	2	0	0	1	0	2	0
27	2	1	1	0	2	1	0	1	2	1
28	3	1	1	1	2	2	2	2	2	3
29	2	0	0	1	1	1	1	1	1	3
30	3	1	0	2	1	3	3	3	3	1
31	3	0	0	0	1	2	1	0	0	1
32	4	2	3	1	2	0	0	1	0	1
33	1	0	0	1	3	0	1	1	1	2
34	1	0	1	0	0	1	0	0	0	1
35	1	1	1	0	0	1	0	2	1	2
36	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2
37	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
38	2	2	2	0	0	0	0	0	0	1
39	2	1	0	0	0	1	0	1	0	1
40	3	1	1	1	1	2	2	2	1	3
41	2	1	2	1	1	0	1	2	2	2
42	4	1	2	0	1	2	0	2	2	1
43	1	1	1	1	1	3	3	2	1	4
44	1	0	1	1	2	2	4	1	1	2
45	1	4	1	3	0	4	3	4	4	4
46	4	1	1	0	1	2	0	0	0	0
47	1	1	1	1	1	0	2	1	2	3
48	3	1	1	0	3	2	1	2	1	2
49	1	3	2	2	1	1	2	2	0	2
50	3	1	2	1	1	0	2	0	1	2
51	0	1	2	0	0	1	2	0	1	2
52	1	2	1	2	1	3	1	1	1	2
53	2	1	1	1	0	1	1	2	2	2
54	3	2	2	2	2	2	1	1	1	1
55	1	1	1	3	1	0	1	0	0	3
56	3	3	2	1	2	1	1	3	2	1
57	2	2	2	1	0	1	1	1	1	2
58	14	11	8	8	7	9	11	9	6	11
59	0	3	1	2	1	1	1	2	2	3
60	2	0	0	0	0	0	1	2	2	2
61	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0
62	1	2	1	1	2	2	2	1	1	2
63	2	2	1	1	1	1	1	1	2	2
64	2	3	2	1	0	1	1	2	1	3
65	0	0	2	2	0	1	0	0	1	1
66	0	1	1	1	1	2	2	1	1	1
67	2	1	1	2	1	1	0	0	0	1
68	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2
69	4	2	2	1	1	2	2	1	1	2
合計	153	98	84	78	66	100	83	87	75	107

六十九首本『小町集』の考察

【資料2】

69首 番号	詞書等 総文節数	b書陵と c高松	c高松と e蓬左	b書陵と e蓬左	c高松と a神宮	b書陵と a神宮	e蓬左と a神宮	d大和と a神宮	c高松と d大和	b書陵と d大和	e蓬左と d大和
1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2
3	6	6	4	4	3	4	4	2	2	2	3
4	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0
6	3	2	1	1	3	2	1	1	1	1	2
7	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1
8	5	4	3	2	3	4	1	2	1	1	1
11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
25	6	4	1	2	1	2	4	4	1	2	3
31	4	4	3	3	3	3	4	2	3	3	2
40	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
45	4	4	3	3	2	2	1	3	3	3	2
49	5	5	2	2	0	0	1	2	1	1	3
53	5	5	2	2	2	2	2	0	1	1	2
54	7	3	4	1	5	1	3	2	2	4	1
55	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0
56	6	2	3	2	1	2	3	0	2	2	2
58	9	5	5	4	3	1	3	2	4	3	5
61	8	2	3	3	2	3	2	2	4	3	5
62	4	2	2	3	0	0	0	0	1	2	1
65	6	6	6	6	5	5	5	3	3	3	3
66	6	6	2	2	2	2	2	3	3	3	3
67	11	7	6	7	7	6	4	4	6	6	6
68	24	13	15	11	13	9	13	10	13	11	13
69	28	20	14	10	11	10	10	8	14	12	17
合計	156	107	82	72	68	60	65	52	69	68	77

【資料3】 句番号は、69首本番号である。以下同じ

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
16-3	藤な三の	藤奈三能	藤奈三の	藤浪の	藤浪の
18-1	木可らし乃	木加らし乃	木加らしの	木枯の	木枯の
08-2	屋へ乃白雲と	やへ乃志ら雲と	やへの志ら雲と	やへ白雲と	屋へ白雲と
09-1	恋王ひぬ	こ比わ比ぬ	己ひ王ひぬ	恋侘て	恋侘て
22-1	可きりなき	加きりなき	可きりな幾	かきりなく	かきりなく
32-4	言乃葉さへそ	言能者さへそ	ことの者さへそ	木葉佐へこそ	こ能葉さへこそ
41-2	阿ふ多の三こそ	あふ多能三こそ	あふ多の三こそ	あふこ(多 傍書)の三こそ	あふこ能三古こそ
53-5	徒れな可り个り	津連那可り个り	津連那可り个留	つれな可り个れ	つ連那かり遣禮
61-0	あまこひ乃うたよむへきせんし耳	あ万こひの哥よむへきせんし耳	あまこひのう多よむへきせんし尔	あ万能古ひの哥よむへきせんし尔	あまのこひ乃哥よむへきせんし尔
61-3	多ちさ八き	たちさ八き	たちさ八き	立佐八き	立さ八起
66-0	人乃古ころうら三侍り个る比も佐尔やとそ	人乃心うら三侍り个留ころ是も佐尔やとそ	人の心うらみ侍り个留ころ是も佐尔やとそ	人の心うら三侍りけ留比	人の心うら見侍り个流比もさにやとそ

## 【資料4】

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
56-0	を三なへしをい 登於保く保りて 見す留人耳	を三なへしをい と於本く本りて 三須留人耳	を三なへし於い と於ほく本りて 三す留人耳	女郎花をいとお 本く折てみ春留 人耳	を三なへしをい とおほく於りて 見春留人耳
56-1	なにし本へ八	なにし本へ八	な尔し本へ八	なにしをへ八	な尔しおへ者
56-4	おく(ら 傍 書)れ尔个り奈	おられに个り奈	おられ尔个りな	於ら連に个りな	おら連尔遣り那
61-5	日くちあけ多へ (まい 傍書)	日くち明多へ (まい 傍書)	日くち明給へ	みちあ遣多へ	三地明け給へ

## 【資料5】

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
01-0	五月五日人尔	五月五日人を	五月五日人於	五月五日人を	五月五日人を
01-2	人尔もた由く	人にもた由と	人尔も多ゆと	人尔も堂ゆとミ	人尔も堂ゆミ
10-4	こと楚○(とも 傍書)なく	ことそともなく	ことそ(判読不 能)(も 傍書) なく	ことそともなく	ことそ尤なく
13-3	あかぬよは	あ八ぬよは	あ八ぬよ八	あ八ぬ夜八	あ八ぬよ八
21-3	可よへとん(も 傍書)	加よへとん	可よへと無	通とも	かよへ尤

## 【資料6】

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
68-0	阿者て可多三耳 由き(て 削除 の跡)け留人乃	あ八て可多み耳 由き个る人能	あ八て可多み尔 ゆきける人の	あ八てか多三尔 ゆきけ留人の	あ八てか多三尔 ゆき希留人乃
	於もひも可 <sup>け</sup> も なき(削除の記 号)所尔	思ひも可 <sup>け</sup> ぬ所 耳	おもひも可 <sup>け</sup> ぬ 所尔	おもひもか <sup>け</sup> ぬ 所尔	おもひも可 <sup>け</sup> ぬ 所尔
	哥よむこ恵乃し 个れ盤	哥よむこ恵の志 个連八	う多よむこ恵 (へ 削除の跡) の志个れは	哥よむ声の志个 れ八	哥よむ聲能し个 れ八
	おそろしな可ら よりにきけ盤	おそろしな可ら よりにきけ八	おそろしな可ら よりにきけ八	おそろしな可ら よりにきけ八	於そろしな可ら よりにきけ者

## 【資料7】

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
37-4	見てや、三(に 傍書)て	三てや、三尔て	三てや、み尔て	三てや屋三万 (尔 傍書)て	三てや屋三尔て
44-2	可り本尔幾ぬ留	可り本尔き井る	可り本尔きい留	可り本尔きぬ留	可り保尔きぬ留
56-2	な越むつまし三	猶無つ万し三	猶むつまし三	猶むつまし三	猶むつまし三
58-36	セルゝ留たつの	せにゝ留多つ能	セルゝ留多つの	セルゝ留多川の	セルゝ留多つの
68-4	をのと八なくし (い者イ 傍書)	を能と八なくし	おのと八なくし	をのと八ならし	をの登八ならし

## 【資料8】

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
58-10	志けき八万佐留	志けさ八万佐留	志けさ八末さ留	志けき八万佐留	志けき八末佐留
64-5	忘れしより	忘れしより	忘れしより	忘れしより	忘れしより

## 【資料9】

句番号	a 神宮文庫本	b 書陵部本	c 高松宮本	d 大和文華館本	e 蓬左文庫本
16-4	なひくかことは	な比く可と八	なひくこと八	なひく加古と八	なひくかこと八
21-4	うつ、に人め	うつ、尔人め	うつ、尔人め	うつ、尔人能	うつ、尔人の
52-4	よ越う三れた留	よをう三れ多留	よ越うみ連多留	世をうみ王多留	よ越うみ連多留
53-1	今とても	今とても	今とても	今とても	今八とて
58-10	志けき八万佐留	志けさ八万佐留	志けさ八末さ留	志けき八万佐留	志けき八末佐留
58-19	冬能夜能	婦由のよ能	ふゆのよ能	冬濃夜の	冬乃まの
58-28	飛留時もなく	ひ留時のなく	ひ留時那く	ひ留時もなく	ひ留時もなく